

たわけであるが、等しく文化変化の研究を称し乍ら先の立場との逕庭は掩い難いものがある。Ogburn が専ら文化変化の契機の究明に当り、勢い機械的分析に終止し勝ちであつたのに対し、Malinowski は変化のプロセスの法則を求めてプロセスの中に身を投じた。そして之は所詮「文化は何故変化するか」と

「文化はどのように変化してゆくか」と言う問題意識の相違に帰着する。前者が現代文明の茫大さに対する省察に連がるとすれば、後者は奇妙な変化を経過しつつある植民地原住民文化とその統治策とに關連する。Malinowski は自らの此の立場を良く意識し、文化変化の研究に従事する人類学者は、植民地統治の實際問題に觸れることを免れ得ないと述べている (p. 5)。そして、それと言うのも、今日歐米文化に「汚れざる」孤立した未開文化と言うものは存在せず、存在するのは接触し変化の過程にある文化だけだからである (p. 21-3)。然し先に述べた如く、Malinowski の求める処が結局文化変化の普遍的な法則であるとするならば、研究のフィールドは植民地原住民に限られるわけではない。それは植民地での

研究が、局外に立つて観察し易く、且つ問題がより単純で分析し易いと言う便宜的理由に基くものだと言う (p. 1)。然りとすれば、当面の問題意識とフィールドの相違にも拘らず、文化変化の法則を求める限りにおいて Ogburn と Malinowski との逕庭は必しも絶対的とは思われないのではなからうか。

—石川榮吉—

最近の日本考古学の

発掘報告書

ここでは、大体この一年間に発表された報告書について、重要と思われるものを数点取り上げることとする。むしろ、このように一括して論じた方が、その特色を把握し易いこともあろうかと考えるからである。

敗戦以来、考古学に対する関心が高まるに従つて、発掘事業は誠に多い。しかしながらそれに必然的に伴うべき報告書の出版は誠に少い。その意味に於て、これらの報告書の意義は第一に出版そのものにある。一日も早くかかる傾向の是正が行われねばならない。次に、「吉胡」は別として、他の報告書がすべ

て学会に關係することは一応注目してよからう。これは、正常な道が学会の推進によつて行われて居ることを示唆する。

従来、特に古墳關係に於ては、偶然の機会からする発掘が多かつた。各種土木事業による破壊に先立ち、充分の學術調査の行われることは、極めて有意義であり、今後も力を尽さねばならぬことは言う迄もない。しかし、それと同時に学界の問題点を説明せんがため、或る目的を持つた計画的発掘の必要は大い。その傾向が以下に紹介する報告書に認められるのは当然のことではあるが、ここにも意義を認むべきであらう。

松本信廣・藤田亮策・清水潤三・江坂輝弥
加茂遺蹟——千葉県加茂独木舟出土遺蹟の研究——(三田史学会、考古学・民族学叢刊第一冊)

本書は慶応大学考古学研究室の事業として行われた千葉県安房郡豊田村加茂遺蹟の調査報告である。遺蹟の地誌学的記述や、発掘の経過などの遺蹟に關する諸項と、木製遺物の記述を清水氏が、土器と石器を江坂氏が分担

し、松本博士の執筆にかかる上代独木舟の研究と題する一章と、藤田教授の緒言をあわせて本篇としている。他に地学、動植物学等の自然科学部門に属する専門学者の本遺蹟に関する所説が七項にわたつて附載されている。

加茂遺蹟からは縄文式土器の前期から中期にわたる諸型式が発見されている。したがつて本書にもまた本文と図版との相当の部分をそれらの土器の記述にあてている。しかし、本書は単なる縄文式土器出土遺蹟の報告ではない。松本博士の丸木舟研究との関聯において、かつて丸木舟の発見を見た本遺蹟の調査が計画せられ、幸にも新に丸木舟の一例を発掘しえたところに、この報告書のもつ独自の価値を認めるべきであらう。しかもその丸木舟は、確実な諸儀式土器を伴出したことによつて、縄文文化前期の遺物であることが立証せられ、わが国における最古の舟の遺品であることが立証せられたものである。本書における松本博士執筆の一章は、日本各地出土の丸木舟の資料を学史的に通覧し、縄文文化前期に属する本遺蹟発見の割竹型系統の長方形刳舟と、八日市場遺蹟その他の縄文文化後期

に属する鐮節型刳舟との確認を通じて、弥生式文化における外海用構造船の出現の背後に、これらの二種の舟型の併存を推察するなど、傾聴すべき所説に富んでいる。

加茂遺蹟において独木舟が発見された泥炭層は、水子期・矢上期から四枚畑期にわたる諸儀式を出土し、厚さ八〇糎ある。その上に厚さ三〇糎の灰色粘土層があり、同様な土器を含むが、その上の二〇—二五糎の青粘土層には遺物がなく、さらに上部の一〇糎の白色粘土層と、その上の一五〇糎の黒褐色土層からは、四枚畑期および中期の五領ヶ台式、阿玉台式（土層上半部に多い）などの諸型式の土器が発掘されたという。しかしして多田文男氏によれば、青粘土層は水が深い時期のものであり、泥炭層は入江の水が深く、葦が生長してできたものである。また泥炭の上部が灰色泥土化しているのは、水がよいよ浅くなつて表面からの酸化により、泥炭が分解されたものと説明され、上部の黒褐色土層は、潟が陸化して周辺から土が推積したものであるという。つまり、前期に丸木舟の使用された水面は、一時上昇し、その後下降して

中期には急速な土の推積を見るにいたつたこととなる。房州東海岸からわずか二・五料の地点に位置する本遺蹟において、縄文文化当時の水面が現在標高二五米の高度に隆起している事実の明らかにされたことは、考古学上のみでなく、地学上にも重要な発見であつたといえるであらう。もつとも、考古学の報告書としては、重要な遺物の実測図に縮尺の不明または不確実なものが目立ち、報告態度が筆者によつて異りすぎるなど、行き届いた編輯技術が十分に駆使されていない憾みがある。本書のみの問題ではないが最近流行の共同執筆による報告書作成法に対して、反省が加えられる必要があると思う。（昭和二十七年三月、三田史学会刊、B5版、本文一三八頁、英文概要一四頁、図版二一、定価一、〇〇〇円）

文化財保護委員会

吉胡貝塚（埋蔵文化財発掘調査報告第一）

本書は新たに発足した文化財保護委員会が主体となつて愛知県教育委員会がこれに協力し、昭和二十六年三・四月に発掘した愛知県温

美郡田原町の吉胡貝塚の調査報告である。

関係学界の有力な学者の協同調査であり、齋藤忠・大村敏雄・澄田正一・久永春男・山内清男・中山英司・長谷部言人・八幡一郎・後藤守一の諸氏の分担執筆によつてゐる。

本貝塚は日本で最多数の人骨（三〇七体）を出土した貝塚であり、主として本遺蹟と津雲貝塚出土の資料等によつて、清野博士の日本人種論の基礎は構成されて居る。これを新たな資料により再検討することが一つの発掘目的であつた。

清野博士の発掘は大正一一・一二年である。その後の縄文式土器研究の發達は、より詳細な土器の觀察からする時期の設定を要求する。本遺蹟も清野博士の考えられた如き一時期的なものではない。従つて時期によつて埋葬法に変化があるかどうかを確めるためには、新たな発掘が為されねばならなかつた。

又、吉胡は中部地方有数の大貝塚であるので、関東と関西を繼ぐこの地域の縄文式の後晩期の究明にも大きな関心が払われた。

発掘の結果、縄文式の後期より晩期をへて、弥生式初期（一部の人はこれを縄文式と

言い、又水神平式とも呼ぶ）に至る六期の變化の詳細が明確にされたのである。

埋葬については清野博士の発掘人骨に対する知見を補足する事実が多数發見せられた。即ち二五体の人骨中三体の伸展葬を除き、すべて屈葬であるが、伸展葬はすべて時期的に新しく、縄文式後晩期の大半のものは屈葬である。そして、人骨の方位は後期ではまちまちであるが、晩期には頭を東にする風習が行われている。他に甕棺葬が七例發見され、縄文式のものもは乳幼児を入れたものであるが、弥生式の二例では成人骨が入れられている。等である。

犬の埋葬例も多数發見され、先史時代の家犬の問題、日本犬の系統の問題等に関し貢獻する所が大きい。

以上の如く種々の新しい事実が確認され、その成果は注目すべきものである。又、大体その年度中に發掘報告が刊行されていることは、理想的と言ふに近く、国營第一号の名に恥じぬものである。ただ、分担執筆であるために統一を缺くところがあり、特に土器の編年的取扱いが区々になつた点が目立つてい

る。この点は山内氏の記載を基準とすべきものであるが、特にこの部分に重大なミスプリントが多いのは大変惜しまれる。「加茂」の条でも述べた如く、共同執筆の不統一は現在の共同研究の在り方に関する欠陥を示すものではなからうか。重ねてこの点に対する反省の要を強調したい。（昭和二十七年六月文化財保護委員会刊、B5版、本文一九二頁、英文概要十三頁、図版五一、定価一、〇〇〇円）

日本考古学協会編小林行雄著

福岡県糸島郡一貴山村銚子塚古墳の研究

福岡県糸島郡の古代史のうちで、一世紀前後の弥生式時代から五世紀中葉に至る間は、同地が『魏志倭人伝』の「伊都国」の地として、日本古代史上に大きくクローズアップされる時期であるにもかかわらず、考古学的にはこれまで全く空白のまま残されていた。日本考古学協会古墳調査特別委員会が同地の前方後円墳の一つである一貴山村銚子塚の発掘調査を昭和二十四年度の専業に加えたのは、右の実情に対する反省から、特に同地における古墳調査の必要が痛感されたからに他ならな

い。

本書はこの発掘調査の報告書であつて、調査を主査した小林氏が執筆し、調査事実を記した前篇とそれに対する考説を収めた後篇とから成つてゐる。調査の主な対象となつた後円部の竪穴式石室は、長さの短かい割に幅が広く、内部に組合式木棺を収め、周囲に突出した棺の底材上に鏡・武器等の副葬品を置き、天井石の代りに粘土と小さな板石で簡単な上部被覆を施したものであつて、発掘当時には木棺の腐朽に伴う上部被覆の落下により、容易にその実態を把握し難い状況に置かれていたにもかかわらず、調査の際の精密な観察をもととして、よくその本来の埋葬状況を復原した著者の手腕は認められてよからう。これによつて、これまで推測の域を出なかつた組合式木棺と竪穴式石室との組合せが、事実によつて確認されたのであつて、前期—中期における古墳の内部構造の究明に資するところが大きい。この他石室の築成状況・石室外の遺物副葬等これまで閑却され勝であつた方面についても時間の許す限り周到な調査が行われており、調査技術の点で遺憾

はない。出土遺物には鍍金鏡・同範鏡を含む仿製三神三獸々帯鏡・異形勾玉等特徴あるものが多く、特色ある葬法と共に本古墳の存在を異色あらしめてゐる。

しかしながら本書の価値は、その調査・報告技術の優秀さと報告された事実の重要さをもつて尽きるのではない。表題からもうかがへる通り、著者の意図は本書を単なる一遺蹟の報告書から進んで研究書たらしめることであつて、そのため本文の半ば以上に達する紙面が考説に割かれてゐる。ここではまず銚子塚の年代を四〇〇年前後に比定し、更に遺蹟・遺物の両面から当時糸島地方が畿内と密接な関係を持つていたことを論じて、この地の畿内的な古墳文化の開花期が、これまで考えられていた年代よりも約半世紀過つた四〇〇年頃に求められるとの結論を導き出し、伝世鏡の存在からそれ以前にも同地に畿内的な生活が行われていたと考えてよいのではないかと重要な示唆をもつて結んでゐる。しかもその推論の過程には、三神三獸々帯鏡が当時極く少数の鑄造所——おそらく畿内——で作られた後、糸島郡を含む広い地域に分散流通し

ていたことを鏡式や同範鏡の分布の分析によつて論証し、また組合式木棺の存在を再認識し、素戔頭太刀の年代を考定するなど、広く日本全体に関係した業績が示されてゐる。本書で得られたところはなほ「伊都園」の実態を考古学的に明めるにはほど遠いが、本書の出版を機として更に北九州の考古学的調査が強力に推進されるならば、やがて日本古代史学の上にも新しい転換がもたらされるであらう。

（昭和二十七年三月、日本考古学協会古墳調査特別委員会刊、B5版、本文六八頁、英文概要六頁、図版一八、定価五五〇円）。

兵庫県赤穂郡西野山第三号墳

（有年考古館研究報告第一輯）

これは昭和二十六年五月に行われた発掘で、執筆者は島田清・稻崎彰一・上田宏範の三氏である。発掘の動機は、一方では土木工事による破壊をまぬがれることではあるが、又、考古館の真の在り方より来る必然性による。

地方考古館に於て、その地方の遺物を保存することは最も望まれるところであり、更に調査研究をも行うことは理想に近い。本書の刊

行はこれらの意味に於て重要視さるべきものを持つてゐる。関係者の努力に対し、特にこの点で敬意を表したいと思う。

さて、遺跡自体は丘陵を利用した小円墳で、粘土礫を主体とし、外部表飾については知られない。従つてそれ自体特殊な興味をそそるものではない。しかしながら、一度経験したものであれば十分身に覚えのあることであるが、粗質粘土によるこの種の礫の発掘は誠に困難なものである。それをよく克服して構造に対する適確な判断を得るに至つた発掘そのものは注目すべきである。又、近時漸くこの種遺蹟の発掘に於て明らかになつて来た排水溝の構造も亦よく追究されている。即ち主体部の発掘及びその論考に於ては、現在の水準ではほぼ遺憾なきものと言えよう。

遺物の点に於ても、短甲様の塗漆製品、銅身形利器の柄の漆の発見等、ここにも細密な発掘の結果を見ることが出来る。漆等の検出は最も注意と根気を要するものであり、これからの発掘は、これをおろそかにするならば、発掘と破壊との併行という非難も受けねばなるまい。

遺骸頭部附近発見の四神四獣鏡は、有名な山城の久津川車塚出土の鏡と同鏡であることが確認された。現在、本邦古墳出土の同鏡鏡の研究は増々重要性を加へている。この時に当り、學術發掘品としての一例をここに加へ得たことは寄与するところが大きい。

要するに、本書はこの種の報告書として、十分その目的を達して居り、又、重ねて言うが、地方考古館の事業として、正しき方向を指向している点が重要である。ただ、遺蹟、遺物の記述のむづかしさは十分理解されるが、今一息の平易さを望みたく、又、後論の考察も、もう少し広い見地と、精細さが望ましいように思われる。(昭和二十七年十月、有年考古館刊、B5版、本文四八頁、英文概要三頁、図版十三)

東亜考古学会編
対馬(東亜考古学叢刊乙種第六冊)

従来、東亜大陸にその活動の舞台を求め、種々の業績を残して来た東亜考古学会も、敗戦の結果大陸の調査は不能となつた。そこで先づ着目されたのが、日本上代に於ける大陸

交渉史上の要路にあたる壹岐・対馬である。歴史の変化はこれらの島を西海の孤島としておき忘れしめた。これはかえつて島の保守性が貴重な資料を宝蔵するに役立つ。更にこの地の要塞地帯からの開放は、調査の絶好の機会を提供することとなつた。

東亜考古学会は昭和二十三年、京大梅原教授を長とする調査団を対馬に派遣して以来、壹岐・対馬の調査を続行しているが、本書はその報告の第一冊であり、水野清一・樋口隆康・岡崎敬の三氏の執筆に係る。

内容は調査の性格から、対馬の遺蹟全般にわたるが、第一章はシタル遺蹟を中心とする縄文文化、青銅製品を出したことから古来著名なクビル・白岳の遺蹟、賀谷の弥生式洞窟住居址等の考察。第二章は青銅器利器に著しく見られる本島の特殊性の問題。第三、四章は古墳時代、特に積石塚の考察。第五章は天智天皇の築いた城山山城址の研究。等々を内容とし、結語に於て、これらの考古学的知見を歴史の流れの中に投影せしむべく、魏志倭人伝・書紀等の文献を照応しながら、対馬を中心とした大陸交渉史を展開している。

本書を通じて、特に注目されるのは、対馬が最初から、北九州と同一文化圏に属していることで、これは各時代を通じて変らない。しかし、このことは南鮮の考古学的知見の乏しい事実からして、なお連断をゆるさない問題ではなからうか。次に、特に青銅利器について顯著に認められるのであるが、外来文化が一旦北九州へ伝えられ、日本化した後この島に逆輸入されている事実が確かめられた。これは文化の伝播の一つの法則を示すものであり、一中心から他の中心に伝わり、その後中心から文化圏の末端に伝えられて行くのである。かくして対馬の単なるステッピング・ストンの性格はよく理解されるであらう。

以上述べた所で明らかな如く、本書は新しい地域調査の試みとして注目すべきものを持つて居る。又、考古学と文献史学とを総合せんとする指向も、従来の考古学の狭さを打破する意味で重要であらう。

ただ、調査団が主として考古学者にのみ限られたことは、前述せるこの島の特殊性から言つて、又、総合的考察の必要から考えて、遺憾とせねばならぬ。関係諸科学の協同こそ

は、より広い見地からする考察を可能とするからである。その意味で、その後行われた九学界協同の調査の成果を期待する。(昭和二八年一月、東亞考古学会刊、B5版、本文二四〇頁、英文概要三八頁、図版七一、定価一、八〇〇円)。

以上五冊の報告書を取扱つたが、書評としては例外的に長いものとなつたので、割愛させていただいた報告書もあり、又、最近刊行されたと知りながら、入手が遅れたため、ここに取り上げられなかつたものもあるのを御了承願いたい。ここでは、考古学の年代決定法に翻期的な意義を持つ放射性炭素による測定値が、姥山貝塚の資料によつて、日本では初めて明らかにされたことのみを附言して置く。(日本考古学研究所刊、ジェラード・グロート、篠達喜彦著、「姥山貝塚」参照)

小林行雄、樋口隆康、坪井清足、横山浩一、藤沢長治

執筆者紹介

有光教一	京都大学助教
梅溪昇	京都大学人文科学研究所助手
西村陸男	京都大学助教
北村敬直	大阪市立大学助教
姜在彦	大阪市立大学研究生
平田嘉三	広島大学助手
赤松俊秀	京都大学助教
時野谷勝	広島大学教授
高尾一彦	神戸大学講師
前川貞次郎	京都大学助教
石川栄吉	京都大学助手
小林行雄	大阪大学講師
樋口隆康	京都大学講師
坪井清足	京都大学院学生
横山浩一	京都大学助手
藤沢長治	京都大学院特別研究生